

第6章 基礎的生活特性尺度の作成

1. 本尺度作成の考え方・目的

本尺度は、社会生活を送る上で必要な心構えや行動を測定することを目的としている。

日頃の健康管理や時間管理、周囲の人との接し方などは、職業生活を送る上で基盤となる能力である。大学生等の未就業者にとっては、職業生活への移行をスムーズにするために非常に重要な能力と考えられる。そのため、職業選択を行う際には、興味や志向性だけでなく、このような基礎的生活特性の重要性を十分理解した上で、自分自身の状態を確認し、改善していく必要がある。

2. 作成の方法

予備調査で得られた項目を基に、内部での検討を重ねて全 32 項目からなる尺度を作成した。予備調査では社会生活上の信念を表す生活因子 1 (12 項目) と日常生活上の自己管理行動の実践を表す生活因子 2 (5 項目) が得られた。尺度の妥当性と信頼性をより高めるために、それらの項目に加えて生活因子 1 に 5 項目、生活因子 2 には 10 項目を新たに作成し、追加した。項目の追加作成に際して、社会生活上必要と考えられる信念や行動を可能な限り網羅するよう注意した。回答には、「1 =あてはまらない」から「5 =あてはまる」までの 5 段階評定を用いた。

3. 項目分析の結果

分析の前に、回答された評定値の変換を行った。本尺度は調査の際、回答を最小値 1 (あてはまらない) ~最大値 5 (あてはまる) の 5 段階評定で求めたが、最小値 0~最大値 4 の 5 段階評定となるよう本章で用いるすべての項目得点を変換した。以降の分析結果は、すべて変換後の値を使用して実施している。

作成された全 32 項目を対象に各項目に回答偏向がないか確認した。その結果、項目 1「与えられた課題や提出物の提出期限はきちんと守りたい」、項目 15「少額でも人からお金を借りるのは抵抗がある」、項目 31「人に迷惑をかけたくない」の 3 項目に天井効果が見られたため、これらの項目を以降の分析から除外した。

本尺度の測定対象をより明確に測定するためには「生活」に直結した内容を表す項目を中心とする必要があると考え、「仕事」やそれに準じる単語 (例えば「アルバイト」) が含まれる項目を事前に分析から除外した。除外した項目は、項目 5「頼まれた仕事は最後まで責任をもってやりとげる」、項目 9「報酬をもらうからにはアルバイトでも一生懸命働きたい」、

項目 10「仕事や作業を手際よく行うことができる」、項目 14「仕事や学校の課題は、趣味や娯楽より優先する」、項目 19「仕事や学校の課題には、精一杯努力して取り組みたい」、項目 29「任された仕事には最後まで責任をもって取り組みたい」の 6 項目であった。よって、以降は 23 項目を対象に項目分析を実施した。

(1) 探索的因子分析

最尤法による探索的因子分析を行ったところ複数因子が確認されたため、調査前に想定した因子数 2 に固定した上で Promax 回転を行った。その結果、ほとんどの項目が事前の想定通りの因子に負荷を示したが、因子 1 には調査前に因子 2 の候補としていた 5 項目が含まれていた(項目 16「与えられた課題や提出物は期限通りに出す」、22「忘れ物をしないよう外出前に確認している」、12「身だしなみをきちんと整えている」、26「大事なことには集中して取り組める」、30「体調が悪いときは無理をしない」)。これら 5 項目と因子 1、2 どちらにも .40 以上の負荷を示さなかった項目 23「少しずつでも貯金をするように心がけている」を除外して再度因子分析を行った。結果を図表 6-1 に示す。

図表 6-1 基礎的生活特性尺度の因子分析結果

項目 番号	項目内容	因子負荷量	
		1	2
第 1 因子			
11	約束の時刻には遅れないように気をつけている	.76	-.12
7	目上の人に対しては敬語を使うようにしている	.74	-.12
25	日頃の体調管理は重要だ	.70	.03
13	人との約束を急にキャンセルすることは少ない	.69	-.11
3	欲しい物があっても高額な場合は買う前によく考える	.64	-.08
17	将来の生活設計を考えることは必要だ	.61	.11
32	連絡をもらったら、すぐに返事をする方がよい	.60	-.02
21	収入に見合った生活をするよう心がけている	.48	.26
27	日々、周りの人に挨拶をするよう心がけている	.42	.30
第 2 因子			
8	数年先の目標に向けて現在の行動計画を立てている	-.15	.79
24	将来の生活設計を立てている	-.06	.76
2	1 年先の自分の生活について想像できる	-.19	.71
4	普段の自分の食事は栄養のバランスがとれていると思う	-.05	.61
6	普段、睡眠や食事の時間に関して、規則正しい生活をしている	.02	.55
20	自分の健康に気を配っている	.26	.52
28	普段から、身の回りの整理整頓をしている	.21	.47
18	やるべきことを先延ばしにしない	.26	.41
因子間相関		.49	

因子 1 は社会生活を送る上での心がけや信念を表す 9 項目で構成されたため、「社会生活への心構え」尺度と名付けた。因子 2 は日頃の生活で実際に行っている行動に関する 8 項目がまとまった。

テスト全体のバランスを考慮し各因子 6～8 項目に絞る必要があるため、因子ごとにさらに項目選定を行った。因子 1 は得られた 9 項目を対象に主成分分析を実施した。一方、因子 2 は項目内容の性質から、1 つの尺度としての得点化を実施するよりも、一つ一つの項目内容に関して遂行程度をチェックすることが受検者にとって有効であると判断した。そのため、チェックリストの機能を持たせるに足る 10 項目を選定することとした。しかし、因子分析の結果では 8 項目しか得られなかったため、調査前に因子 2 の候補であった 15 項目から「仕事」に関する語を含む 2 項目を除いた 13 項目を対象に主成分分析を行った。選定された項目群を「日常生活チェックリスト」とした。因子 1、因子 2 ともに、項目の選定には、主成分負荷量に加え、項目間の内容の重複や項目文の長さも考慮した。

(2) 因子 1 「社会生活への心構え」尺度の項目選定

因子分析により第 1 因子として得られた 9 項目を対象に主成分分析を行った。その結果、第一主成分のみが得られ、すべての項目が.60 以上の高い負荷量を示した。項目内容、主成分負荷量、各項目の平均値と標準偏差ならびに採用項目数ごとの各項目の採否を図表 6-2 に示す。

図表 6-2 社会生活への心構え尺度の主成分分析結果
および各項目の平均値(M)と標準偏差(SD)

採用項目数ごとの採否			項目 番号	項目内容	第一主成分 への負荷量	M	SD
8	7	6					
○	○	○	25	日頃の体調管理は重要だ	.75	2.91	.98
○	○	○	11	約束の時刻には遅れないように気をつけている	.73	2.91	1.00
○	○	○	7	目上の人に対しては敬語を使うようにしている	.73	2.96	1.02
○	○	×	17	将来の生活設計を考えることは必要だ	.72	2.79	.99
○	×	×	13	人との約束を急にキャンセルすることは少ない	.68	2.90	1.01
×	×	×	3	欲しい物があっても高額な場合は買う前によく考える	.66	2.93	1.07
○	○	○	21	収入に見合った生活をするよう心がけている	.65	2.57	1.02
○	○	○	32	連絡をもらったら、すぐに返事をする方がよい	.64	2.71	.97
○	○	○	27	日々、周りの人に挨拶をするよう心がけている	.62	2.53	1.07

はじめに、8 項目の選定を実施した。すべての項目の主成分負荷量が十分な値であったため、選定にあたり項目内容の重複に注目した。その結果、項目 3 「欲しい物があっても高額な場合は買う前によく考える」(負荷量.66)と項目 21 「収入に見合った生活をするよう心がけている」(負荷量.65)に内容の重複が見られた。これらは負荷量に大きな違いが見られな

いことから、文章の長さが他項目と同程度である項目 21 を採用した。

次に、7 項目選定のため、さらに内容の重複がないか確認した。項目 11「約束の時刻には遅れないように気をつけている」と項目 13「人との約束を急にキャンセルすることは少ない」において「約束」という共通する語が含まれていたため、負荷量の低い項目 13 を除外した。

最後に 6 項目の選定では、7 項目版の項目間の内容の重複が確認されなかったため因子 2 の項目群と類似した項目がないか確認を行った。項目 17「将来の生活設計を考えることは必要だ」は、因子 2 の項目 24「将来の生活設計を立てている」と内容が類似していると判断し、6 項目版では除外した。

採用した項目について信頼性係数（クロンバックの α ）を算出したところ、8 項目 $\alpha=.85$ 、7 項目 $\alpha=.83$ 、6 項目 $\alpha=.80$ と高い値が得られ、いずれの項目数を採用した場合でも信頼性は十分であると判断した。信頼性係数の一覧を図表 6-3 に示す。

図表 6-3 信頼性係数(α)の一覧

	α
6 項目	.80
7 項目	.83
8 項目	.85

(3) 因子 2「日常生活チェックリスト」の項目選定

前記(1)の通り、調査前に因子 2 を想定して設定された項目群から 13 項目を対象に主成分分析を実施した。その結果、2 つの主成分が得られたが、第 2 主成分に .60 以上の負荷量を示した項目は見られなかったため、概ね 1 つの主成分にまとまっていると判断した。第 1 主成分へ .60 以上の負荷量を示した 8 項目を採用し、加えて、.60 以下の負荷量を示した項目のうち項目 6「普段、睡眠や食事の時間に関して、規則正しい生活をしている」および項目 4「普段の自分の食事は栄養のバランスがとれていると思う」の 2 項目の負荷量が .59 と .60 に近似した値であったため採用とした。よって、これら 10 項目を「日常生活チェックリスト」の項目と決定した。主成分負荷量および各項目の平均値と標準偏差を図表 6-4 に示す。確認のため、採用した 10 項目について信頼性係数を算出したところ、 $\alpha=.85$ の高い信頼性係数が得られた。

図表 6-4 日常生活チェックリストの主成分負荷量および各項目の平均値(M)と標準偏差(SD)

項目 番号	項目内容	主成分負荷量		M	SD
		第1主成分	第2主成分		
20	自分の健康に気を配っている	.73	-.03	2.35	1.11
28	普段から、身の回りの整理整頓をしている	.69	.08	2.24	1.13
24	将来の生活設計を立てている	.67	-.36	2.05	1.17
18	やるべきことを先延ばしにしない	.65	.09	2.32	1.10
26	大事なことには集中して取り組める	.65	.29	2.69	1.02
12	身だしなみをきちんと整えている	.62	.35	2.68	1.03
8	数年先の目標に向けて現在の行動計画を立てている	.62	-.49	1.86	1.19
22	忘れ物をしないよう外出前に確認している	.60	.43	2.64	1.03
6	普段、睡眠や食事の時間に関して、規則正しい生活をしている	.59	-.26	1.99	1.20
4	普段の自分の食事は栄養のバランスがとれていると思う	.59	-.35	1.94	1.17

(4) 日常生活チェックリストの項目間の相関

次に、日常生活チェックリストの項目間の相関係数を算出した(図表 6-5)。 $r = .40$ 以上の相関係数は太字で示した。全体として中程度($r = .19 \sim .62$)の有意な正の相関が示された。

図表 6-5 日常生活チェックリスト項目間の相関係数 (Pearson の r)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1 自分の健康に気を配っている	-								
2 普段から、身の回りの整理整頓をしている	.44 ***	-							
3 将来の生活設計を立てている	.41 ***	.39 ***	-						
4 やるべきことを先延ばしにしない	.39 ***	.43 ***	.40 ***	-					
5 大事なことには集中して取り組める	.42 ***	.39 ***	.33 ***	.39 ***	-				
6 身だしなみをきちんと整えている	.40 ***	.43 ***	.28 ***	.31 ***	.46 ***	-			
7 数年先の目標に向けて現在の行動計画を立てている	.36 ***	.34 ***	.62 ***	.34 ***	.29 ***	.22 ***	-		
8 忘れ物をしないよう外出前に確認している	.39 ***	.39 ***	.26 ***	.37 ***	.41 ***	.41 ***	.19 ***	-	
9 普段、睡眠や食事の時間に関して、規則正しい生活をしている	.46 ***	.36 ***	.33 ***	.31 ***	.23 ***	.26 ***	.34 ***	.23 ***	-
10 普段の自分の食事は栄養のバランスがとれていると思う	.49 ***	.33 ***	.35 ***	.26 ***	.23 ***	.24 ***	.39 ***	.21 ***	.48 ***

*** $p < .001$.

(5) 社会生活への心構えと日常生活チェックリストの相関

社会生活への心構えと日常生活チェックリストの関係を確認するため、相関係数を算出した。その結果を図表 6-6 に示す。 $r=.40$ 以上の相関係数は太字とした。

なお、本項以降の分析において、社会生活への心構え尺度の得点は、6～8 項目採用版いずれも、尺度を構成している項目の合計得点を用いている。

図表 6-6 社会生活への心構えと日常生活チェックリスト各項目の相関係数

		社会生活への心構え		
		6 項目	7 項目	8 項目
日常生活 チェック リスト	自分の健康に気を配っている	.51 ***	.51 ***	.50 ***
	普段から、身の回りの整理整頓をしている	.44 ***	.44 ***	.42 ***
	将来の生活設計を立てている	.33 ***	.35 ***	.34 ***
	やるべきことを先延ばしにしない	.44 ***	.44 ***	.44 ***
	大事なことには集中して取り組める	.63 ***	.63 ***	.63 ***
	身だしなみをきちんと整えている	.60 ***	.59 ***	.61 ***
	数年先の目標に向けて現在の行動計画を立てている	.26 ***	.28 ***	.26 ***
	忘れ物をしないよう外出前に確認している	.59 ***	.59 ***	.60 ***
	普段、睡眠や食事の時間に関して、規則正しい生活をしている	.28 ***	.27 ***	.27 ***
	普段の自分の食事は栄養のバランスがとれていると思う	.24 ***	.24 ***	.23 ***

*** $p < .001$.

社会生活への心構え 6～8 項目それぞれの合計得点と日常生活チェックリストのすべての項目間で有意な正の相関が得られた。特に、「大事なことには集中して取り組める」(6～8 項目いずれも $r=.63$)、「身だしなみをきちんと整えている」($r=.59\sim.61$)、「忘れ物をしないよう外出前に確認している」($r=.59\sim.60$) とは比較的高い正の相関が示された。社会生活を送る上で必要な行動を重要視し日常的に心がけている人ほど、日々の生活で必要となる基本的な行動をよく実践している傾向にあると解釈できよう。

(6) 基礎的生活特性尺度得点の男女別平均値

社会生活への心構え得点と日常生活チェックリストの各得点について、男女別に平均値と標準偏差を算出した。さらに、男女(男性 1,198 名、女性 1,195 名)で平均値に差があるかどうか検討するため t 検定を実施した(図表 6-7)。

図表 6-7 基礎的生活特性尺度得点の男女別平均値(M)、標準偏差(SD)および t 検定結果

		男性		女性		計		t検定結果
		M	SD	M	SD	M	SD	
社会生活への心構え	6項目	16.25	4.27	16.94	4.28	16.60	4.29	-3.93 *** 男性<女性
	7項目	19.00	4.94	19.77	4.96	19.38	4.96	-3.81 *** 男性<女性
	8項目	21.88	5.59	22.70	5.60	22.28	5.61	-3.58 *** 男性<女性
日常生活チェックリスト	自分の健康に気を配っている	2.32	1.10	2.38	1.11	2.35	1.11	-1.37
	普段から、身の回りの整理整頓をしている	2.16	1.10	2.32	1.15	2.24	1.13	-3.33 *** 男性<女性
	将来の生活設計を立てている	2.06	1.17	2.05	1.16	2.05	1.17	0.08
	やるべきことを先延ばしにしない	2.32	1.06	2.33	1.13	2.32	1.10	-0.19
	大事なことには集中して取り組める	2.64	1.01	2.73	1.03	2.69	1.02	-2.30 * 男性<女性
	身だしなみをきちんと整えている	2.52	1.04	2.84	1.00	2.68	1.03	-7.55 *** 男性<女性
	数年先の目標に向けて現在の行動計画を立てている	1.91	1.16	1.80	1.21	1.86	1.19	2.18 * 男性>女性
	忘れ物をしないよう外出前に確認している	2.61	1.01	2.68	1.06	2.64	1.03	-1.56
	普段、睡眠や食事の時間に関して、規則正しい生活をしている	1.98	1.15	2.00	1.25	1.99	1.20	-0.31
普段の自分の食事は栄養のバランスがとれていると思う	1.98	1.17	1.90	1.18	1.94	1.17	1.69	

*** $p < .001$, * $p < .05$, + $p < .10$

社会生活への心構えの合計得点に性別による有意差が見られ、すべて女性の方が男性よりも得点が高かった。日常生活チェックリストでは、「普段から、身の回りの整理整頓をしている」、「大事なことには集中して取り組める」、「身だしなみをきちんと整えている」の3項目で女性が男性より有意に得点が高かった。一方、「数年先の目標に向けて現在の行動計画を立てている」は男性の方が女性よりも有意に得点が高かった。社会生活上重要な行動について、男性よりも女性の方が日頃からよく心がけており、身だしなみや整理整頓といった生活の基本となる行動も全般的によく実践している一方、目標達成に向けた行動計画の立案に関しては、男性の方がよく実践していることが明らかとなった。

(7) 基礎的生活特性尺度得点の高等教育課程在学者・在職者の平均値

社会生活への心構え得点と日常生活チェックリストの各得点について、高等教育課程在学者と在職者それぞれの平均値と標準偏差を算出した¹³。平均値、標準偏差の算出に合わせ、在学・在職の平均値に差があるかを確認するため *t* 検定を実施した (図表 6-8)。

図表 6-8 基礎的生活特性尺度得点の高等教育課程在学者と在職者の

平均値 (*M*)、標準偏差 (*SD*) および *t* 検定結果

		在学者		在職者		<i>t</i> 検定結果
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	
社会生活への心構え	6項目	16.81	4.13	16.62	4.25	0.85
	7項目	19.62	4.78	19.41	4.90	0.83
	8項目	22.60	5.43	22.32	5.53	0.99
日常生活チェックリスト	自分の健康に気を配っている	2.39	1.13	2.36	1.07	0.48
	普段から、身の回りの整理整頓をしている	2.16	1.18	2.31	1.08	-2.50 * 在学<在職
	将来の生活設計を立てている	2.01	1.19	2.15	1.11	-2.34 * 在学<在職
	やるべきことを先延ばしにしない	2.22	1.20	2.39	1.03	-2.81 ** 在学<在職
	大事なことは集中して取り組める	2.78	0.98	2.70	1.00	1.51
	身だしなみをきちんと整えている	2.73	1.05	2.69	1.00	0.78
	数年先の目標に向けて現在の行動計画を立てている	1.88	1.20	1.90	1.15	-0.37
	忘れ物をしないよう外出前に確認している	2.70	1.10	2.62	1.00	1.40
	普段、睡眠や食事の時間に関して、規則正しい生活をしている	1.83	1.27	2.06	1.15	-3.48 *** 在学<在職
	普段の自分の食事は栄養のバランスがとれていると思う	1.97	1.22	1.96	1.15	0.21

****p* < .001, ***p* < .01, **p* < .05.

¹³ 高等教育課程在学者は、調査項目 I-④「現在または最終の学歴」に対して、短大、専門学校、高専、大学、大学院に在学中と回答した 599 人のうち、調査項目 II-1「現在の就業状況」に対しても「5.在学中」と回答した 492 人を対象とした。在職者は、調査項目 II-1「現在の就業状況」に対して、「1.正社員・正規職員等」、「2.パート・アルバイト、派遣、契約社員、嘱託等」、「3.独立自営等」で働いていると回答した 1,330 人を対象とした。

社会生活への心構え得点には在学者・在職者に有意な差は見られなかった。一方、日常生活チェックリストでは4項目に差が見られ、いずれも在職者の方が在学者よりも平均値が高かった。有意差が見られた項目の中では「普段、睡眠や食事の時間に関して、規則正しい生活をしている」の t 値が -3.48 と絶対値が最も大きかった。在職者は在学者よりも、日常的な時間の管理や生活環境を整えるなどの行動をよく行っていることが示唆された。

4. 基礎的生活特性尺度と他尺度の関連

最後に、基礎的生活特性尺度と他尺度との関連を検討するため、自尊感情尺度¹⁴得点との相関係数を算出した。社会生活への心構え尺度は各項目数の合計得点を、日常生活チェックリストは各項目の得点を分析に使用した。自尊感情尺度の得点には、山本・松井・山成(1982)の分析結果ならびに本調査の項目間の相関係数の結果から、1項目(「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」)を除外した9項目の合計得点を用いた。結果を図表6-9に示す。 $r = .30$ 以上の相関係数は太字とした。

図表 6-9 基礎的生活特性尺度得点と自尊感情得点の相関係数

		自尊感情
社会生活への心構え	6項目	.18 ***
	7項目	.18 ***
	8項目	.17 ***
日常生活チェックリスト	自分の健康に気を配っている	.31 ***
	普段から、身の回りの整理整頓をしている	.26 ***
	将来の生活設計を立てている	.37 ***
	やるべきことを先延ばしにしない	.25 ***
	大事なことには集中して取り組める	.28 ***
	身だしなみをきちんと整えている	.23 ***
	数年先の目標に向けて現在の行動計画を立てている	.38 ***
	忘れ物をしないよう外出前に確認している	.06 **
	普段、睡眠や食事の時間に関して、規則正しい生活をしている	.24 ***
	普段の自分の食事は栄養のバランスがとれていると思う	.31 ***

*** $p < .001$, ** $p < .01$.

社会生活への心構え得点と自尊感情では有意な正の相関が得られたが値は小さかった。日常生活チェックリストの全項目とも有意な正の相関が得られており、特に「数年先の目標に

¹⁴ 自尊感情尺度項目は資料「『働くことの特性に関する調査』調査票」を参照のこと。

向けて現在の行動計画を立てている」($r=.38$)、「将来の生活設計を立てている」($r=.37$)とは中程度の正の相関が示された。「忘れ物をしないよう外出前に確認している」は標本数が大きいことから有意になってはいるが、相関係数の値を見るとほとんど無相関であった。以上の結果から、特に日常生活チェックリストに挙げた行動をきちんと行っているほど、自尊感情が高い傾向があるという重要な示唆が得られた。

5. まとめ

本章では基礎的生活特性尺度の作成、尺度項目の選定および他尺度との関連を報告した。本尺度は2因子解を採用し、下位尺度ごとにさらに項目の選定を行った。因子1の6～8項目を「社会生活への心構え」尺度とし、因子2の10項目を「日常生活チェックリスト」とした。両尺度とも α 係数の値が高いことから、信頼性は十分であると判断した。

各尺度の得点に性別による違いがあるか検討したところ、女性の方が男性よりも、社会生活への心構えが高く、日常生活においても身だしなみなどの基本的な生活行動をよく実践していた。一方男性は、日頃から、目標に向けた行動計画の立案を女性よりもよく実践していることが示された。また、在職者と在学者の違いによって各尺度得点に差があるか検討した結果、日常生活チェックリストの4項目で有意な差が見られ、在学者よりも在職者の方が日常的に時間や生活環境の管理をよく実践していることが明らかとなった。

最後に、自尊感情得点との関連を検討した。その結果、両尺度とも正の有意な相関が得られた。特に日常生活チェックリストの複数の項目とは中程度の相関が示され、これらの行動の重要性を示唆した。

なお、本調査では日常生活チェックリストを5段階評定によって調査したが、尺度ではなくチェックリストとして利用してもらうという方針変更にともない、評定段階をやや粗くし、「○=いつも出来ている、△=だいたい出来ている、×=出来ていない」の3段階に変更することとした。今後は、この3段階評定によって得られたデータも検討していく必要があるだろう。

引用文献

山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30(1), 64-68.

第7章 新規作成尺度間および職業レディネス・テストとの関連性の検討

1. 目的

今回の職業レディネス・テストの改訂にあたっては、大学生等の高等教育課程の在学者と30歳代前半の若年層に適用することを想定し、本体の職業レディネス・テストに追加して実施する尺度として、「仕事選び基準尺度」、「基礎的性格特性尺度」、「基礎的生活特性尺度」の3つの尺度を作成した。その作成の手続きとそれぞれに含まれる下位尺度の項目選定の方法と結果は第4章から第6章で述べたところであるが、一つの検査に総合的にまとめることを想定するのであれば、3つの尺度間の関連性について検討することは必須の条件である。

あわせて、3つの尺度をまとめた検査が完成した場合、その検査が職業レディネス・テストに追加して実施されることを考えるならば、新しい尺度と本体である職業レディネス・テストとの関連性を検討しておく必要がある。これは新しく作成した尺度が職業レディネス・テストから得られる結果に追加できる情報の内容および本体の尺度で得られた結果の解釈を補強したり見直したりできるような新しい観点を明らかにしておくためである。

そこで、本章では、「仕事選び基準尺度」、「基礎的性格特性尺度」、「基礎的生活特性尺度」の尺度間の関係を検討するとともに、これらの3つの尺度が職業レディネス・テストの職業興味（A検査）、基礎的志向性（B検査）、職務遂行の自信度（C検査）の各尺度との間にどのように関連づけられるのかをデータに基づいて検討したい。まずは、3つの尺度間の関連性について検討し、その後、職業レディネス・テストとの関連性について検討する。

2. 方法

（1）3つの尺度間の関連性の検討

分析に用いたのは、第3章で紹介した調査の回答データと同一である。「仕事選び基準尺度」には6つ、「基礎的性格特性尺度」には2つ、「基礎的生活特性尺度」には1つの尺度が下位尺度として組み込まれた。それぞれの下位尺度の内容をまとめたものが図表7-1である。

本章ではまず、第4章から第6章で個別に示された下位尺度の平均値を男女別および在学者・在職者別にまとめて表示して全体の特徴をみる。その後、9つの下位尺度間の関係について相関係数を算出して関連性の検討を行う。

（2）職業レディネス・テストとの関連性の検討

今回の調査内容には、職業レディネス・テストのA検査、B検査、C検査に含まれる項目すべてが組み込まれていたため、A検査とC検査は各54項目、B検査については64項目を用いて、検査の採点方式通りに得点化を行った。すなわち、A検査は職務内容の記述に対し

て、やりたいと思うかどうかを「やりたい」(2点)、「どちらともいえない」(1点)、「やりたくない」(0点)で回答してもらい、C検査はA検査と同じ項目について、うまくやる自信があるかどうかを「自信がある」(2点)、「どちらともいえない」(1点)、「自信がない」(0点)で回答してもらう。また、B検査は日常生活の行動や考え方として各項目の内容に「あてはまる」(1点)か「あてはまらない」(0点)のどちらかで回答してもらった。

職業レディネス・テストでは、第1章の図表1-1で示した通り、A検査とC検査は6領域(RIASEC)でそれぞれ得点を算出し、B検査は対情報志向(D志向)、対人志向(P志向)、対物志向(T志向)別に得点を算出する。なおB検査の対情報志向は「D1:情報を集める」、「D2:好奇心を満たす」、「D3:情報を活用する」という下位尺度で構成され、対人志向は「P1:自分を表現する」、「P2:みんなと行動する」、「P3:人の役にたつ」、対物志向は「T1:物をつくる」、「T2:自然に親しむ」という下位尺度で構成されている。

今回のデータ分析においては、個人ごとに6領域、3志向性および各志向性に含まれる8つの下位尺度得点をそれぞれ算出した上で、「仕事選び基準尺度」、「基礎的性格特性尺度」、「基礎的生活特性尺度」として作成された尺度得点との関連を検討した。

図表 7-1 各下位尺度の内容

尺度名	下位尺度名	各下位尺度が示す内容
仕事選び基準尺度	自己成長	自らの能力や興味を発揮できる職業を選択し、仕事を通して自身を向上させることに関心をもつこと。
	社会貢献	職業を通じて国や地域社会などの多くの人々のために役立ち、貢献するような活動に関心をもつこと。
	地位	上昇志向が強く、仕事で成功して、高い地位を獲得することを志向すること。
	経済性	職業に就くことによって得られる収入、生活の安定、経済生活の向上といった点を重視すること。
	仕事と生活のバランス	仕事と仕事以外の生活を切り離して考え、どちらかに偏ることなく時間を使うことを志向すること。
	主体的進路選択	職業を選択するとき、周囲の人の考えや意見よりも、自分自身で積極的に選ぶとする傾向が強いこと。
基礎的性格特性尺度	気持ちの切り替え	失敗や困難な場面に際し、極端に落ち込むことなく気持ちを切り替えて前向きに対処することができること。
	外界への積極性	新しい物事や状況に積極的に関わろうとする気持ちをもっていること。
基礎的生活特性尺度	社会生活への心構え	社会生活を円滑に送るために必要な自己管理、周囲との調和に向けた意識をもっていること。

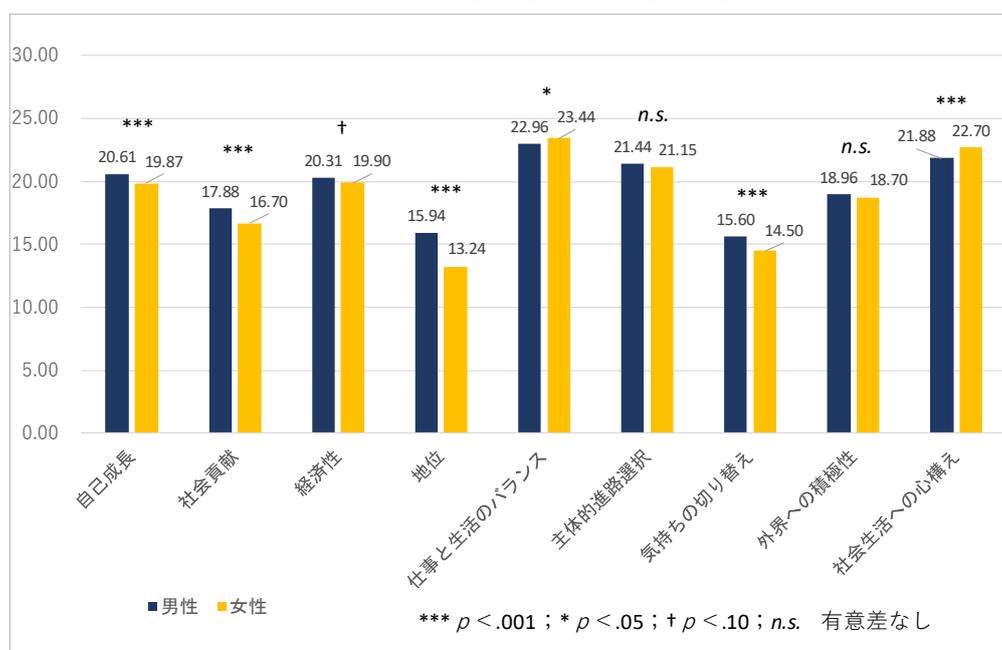
3. 新規作成尺度間の関連性の検討

(1) 9つの下位尺度における平均値の比較

3つの尺度に含まれる9つの下位尺度を用いて、合計得点の平均値を男女間および在学者・在職者間で比較したグラフを図表7-2および図表7-3に示す。合計得点としては各下位尺度とも項目数が最も多い8項目版で算出した¹⁵。各項目は0点から4点で得点化されたため、8項目版の得点は最低点が0点、最高点が32点となる。

まず、平均値を男女間で比較した図表7-2をみると、18歳から34歳の若者がどのような概念の尺度に対して高い評価あるいは低い評価をしているかという傾向を把握することができる。なお、第4章から第6章で行った男女間の平均値の差の検定の有意差についても参考としてグラフ中に示した。

図表 7-2 8項目版の男女別平均値の比較



9つの尺度の平均値を全体でみると、仕事と生活のバランスの値が最も高く、次に高いのは社会生活への心構え、主体的進路選択である。これらの尺度に対して18歳から34歳の若者は肯定的な回答をしており、その結果、21点から23点程度の高い平均値が示されていることがわかる。その次に同程度に高いのは経済性、自己成長、外界への積極性であり、19点から20点程度であった。それより若干低かったのが社会貢献で17点から18点程度となり、

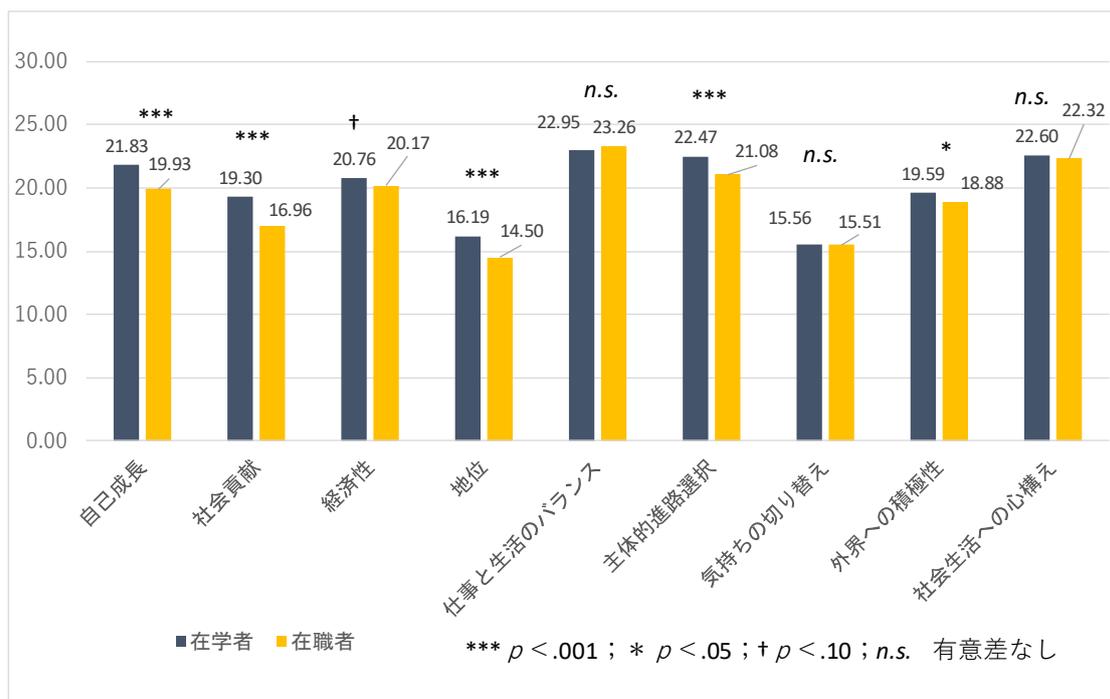
¹⁵ 第4章から第6章で述べた通り、各下位尺度では、それぞれ6項目、7項目、8項目を選んだ。尺度によっては属性間で平均値の差の検定を行ったときに項目数によって若干傾向が異なってしまうものがあったが、項目数が多い方が信頼性係数は高くなるため、グラフの作成には8項目版の平均値を用いた。

さらに低かったのは気持ちの切り替えと地位についての得点となった。辛いことや嫌な出来事に直面したときに気持ちを切り替えることや、組織や仕事上で認められ上昇したいという意識は他の尺度に対する回答に比べ、相対的に低くなっている。なお、男性では地位と気持ちの切り替えは同程度であったが、女性の場合には、気持ちの切り替えの方が高めで、地位の平均値が最も低くなった。地位の尺度に関しては、第4章で示した通り男女間の平均値の差の検定結果において最も大きな t 値が得られていた ($t=9.13, p<.001$)。この他、平均値における男女間の違いについてみておくと、上記の9尺度において女性が男性よりも高めとなったのは仕事と生活のバランスと社会生活への心構えであった。主体的進路選択と外界への積極性に関しては男女間の平均値に有意差は見られず、それ以外はすべて男性の平均値が女性よりも高いという結果が得られた。ただグラフからもわかるように有意差が得られたとしても平均値の値はそれほど大きく違っていないため、サンプルサイズの大きさによる影響もあると考えられる。

次に、9つの尺度について在学者・在職者間で平均値を比較したグラフを示す(図表7-3)。このグラフにも第4章から第6章で行った在学者、在職者間の平均値の差の検定結果を参考として掲載した。

各尺度の平均値の相対的な高さは男女別で集計したときと変わらず、仕事と生活のバランス、社会生活への心構え、主体的進路選択が高く、それに続いて、自己成長と経済性がほぼ同程度となり、外界への積極性と社会貢献がそれよりやや低く、地位と気持ちの切り替えが最も低めとなっている。

図表 7-3 8項目版の在学者、在職者別平均値の比較



なお、仕事と生活のバランス、社会生活への心構え、気持ちの切り替えについては在学者と在職者間で平均値に有意差はみられず、経済性については有意な差の傾向が得られたが ($p<.10$)、その他の尺度については、在学者の平均値が在職者よりも高くなっていた。特に社会貢献、自己成長、主体的進路選択、地位に関する平均値の違いが大きかった ($t=6.06, p<.001; t=5.72, p<.001; t=4.76, p<.001; t=4.61, p<.001$)。就業者よりも在学者において職業や仕事に前向きに取り組みたいという姿勢が強くみられる結果となっている。

(2) 各下位尺度間の得点の相関係数の算出

次に、第4章から第6章で選定された各尺度項目の合計得点を用いて、同じ項目数の尺度間で相関係数を求めた。結果を図表7-4に示す。サンプルサイズが大きいためすべての値が有意となっているが、その中で.30以上の値が得られたものに網掛けを施している。

基礎的性格特性尺度と仕事選び基準尺度との下位尺度間の相関係数をみると、値が.50以上の正の相関が得られたのは、外界への積極性と自己成長、主体的進路選択、社会貢献であった。性格特性として積極的に外へ目を向けて活動していくという特性があるほど、仕事を選ぶ時に自己成長や社会貢献をめざし、選択も自分主体で行っていく傾向が強いことが読み取れる。また、外界への積極性は経済性とも.40以上の正の相関を示し、地位とも8項目のときに.40以上の相関を示した。仕事と生活のバランスとの相関は正の値を示したが、他に比べて高くなかった。また、外界への積極性は基礎的生活特性の社会生活への心構えとも.50以上の高い正の相関を示している。このようなことから、基礎的性格特性として外界への積極性の値が高い場合には、仕事を選ぶ時にも上昇志向が強く、生活態度についての自己管理意識が高い傾向がよみとれる。

図表7-4 仕事選び基準尺度、基礎的性格特性、基礎的生活特性尺度間の相関係数(Pearsonのr)

		仕事選び基準尺度						基礎的性格特性尺度		基礎的生活特性尺度
		自己成長	社会貢献	経済性	地位	仕事と生活の バランス	主体的進路 選択	気持ちの 切り替え	外界への 積極性	社会生活へ の心構え
気持ちの 切り替え	6項目	.308 ***	.314 ***	.232 ***	.341 ***	.047 *	.229 ***	1		
	7項目	.328 ***	.331 ***	.241 ***	.357 ***	.045 *	.271 ***	1		
	8項目	.313 ***	.338 ***	.231 ***	.370 ***	.042 *	.258 ***	1		
外界への 積極性	6項目	.653 ***	.518 ***	.437 ***	.384 ***	.292 ***	.574 ***	.529 ***	1	
	7項目	.654 ***	.527 ***	.417 ***	.374 ***	.297 ***	.579 ***	.572 ***	1	
	8項目	.667 ***	.554 ***	.439 ***	.436 ***	.288 ***	.586 ***	.575 ***	1	
社会生活へ の心構え	6項目	.466 ***	.341 ***	.367 ***	.153 ***	.453 ***	.495 ***	.243 ***	.559 ***	1
	7項目	.492 ***	.365 ***	.372 ***	.148 ***	.470 ***	.531 ***	.244 ***	.577 ***	1
	8項目	.494 ***	.342 ***	.411 ***	.147 ***	.494 ***	.547 ***	.223 ***	.550 ***	1

***... $p<.001$, **... $p<.01$, *... $p<.05$

5.0 ≤ r (太字) 4.0 ≤ r < 5.0 3.0 ≤ r < 4.0

基礎的性格特性尺度のうちの気持ちの切り替えは、ストレスへの耐性という概念を含んでいる尺度であるが、地位、社会貢献、自己成長と.30程度の正の相関を示した。相関係数の値そのものは外界への積極性と地位、社会貢献、自己成長の尺度間でみられた値ほど高くない。また、経済性、主体的進路選択、仕事と生活のバランスとの関係では、値としては正の相関係数が得られたが、特に仕事と生活のバランスとの相関は他に比べて低かった。基礎的生活特性の社会生活への心構えとの関係も正の相関ではあるが、それほど大きな値は得られていない。

基礎的生活特性尺度の社会生活への心構えと仕事選び基準尺度の6つの要素との関係をみると、主体的進路選択との相関が最も高く、7項目版と8項目版では.50以上となった。このことから自己の生活管理についての意識の高さが主体的な進路選択と関連していることが示唆されている。また、自己成長との相関も.40台ではあるが、.50に近い高い値となった。なお、社会生活への心構えと仕事と生活のバランス尺度との関連も高く、項目数によっては.50に近い値が得られた。仕事と生活のバランス尺度は分布が得点の高い方に偏っているという影響もあり、他の尺度との明確な関係が示されにくい尺度であるが、社会生活への心構えとは高い正の相関が得られた。生活態度の規則正しさや普段の生活を大切にするという意識が結びついていると解釈できる。この他、社会生活への心構えと仕事選び基準尺度の相関で、正の.30以上の相関係数が得られたのは、経済性と社会貢献との関係であった。地位との相関係数は有意とはなったものの値は小さく、関連性は高くないことが示されている。

4. 新規作成尺度と職業レディネス・テストとの関連性の検討

(1) 職業レディネス・テストの信頼性の検討と各領域、志向性の平均値と標準偏差の算出

職業レディネス・テストと新しい尺度との関連をみる前に、今回の調査対象者のデータからみた職業レディネス・テストの信頼性について検討した結果¹⁶と職業レディネス・テストの各領域、志向性に関する得点傾向の概要を述べる。

まず、今回の対象者において職業レディネス・テストの各下位検査で項目全体を用いて因子分析を行った結果、職業興味(A検査)と職務遂行の自信度(C検査)についてはRIASECの6領域に該当する項目は現行版と同じ構造となった。また、信頼性係数(クロンバックの α)も6領域全てについて.85以上の高い値となった。このことから職業興味と職務遂行の自信度については、現行版の職業レディネス・テストを高卒者以上の若年者に適用しても検査としての構造と測定の信頼性は保たれていることが確認できた。

他方、基礎的志向性(B検査)については、項目全体での因子分析の結果、一部の志向性において本来の想定とは異なる因子への負荷量が高い項目が7項目見られた。ただし、志向

¹⁶ 本書の目的は、新しい尺度の作成の記述としているため、職業レディネス・テストの適用に関する因子分析の数値など、分析結果の詳細についてはここでは掲載しない。

性ごとに予め項目を分けてそれぞれで信頼性係数を算出した結果、対情報志向 (D) では.87、対人志向 (P) では.90、対物志向 (T) では.86 という高い値が得られた (図表 7-5)。本来の想定とは別の因子に負荷量が高くなった項目は元々の因子に対する負荷量も高いので、これらの項目は 2 つの因子 (志向性) に同時に関連性が高く、そのため上記のような結果が得られたといえる。このように基礎的志向性については、測定の弁別性がやや低くなっている項目が数個存在することがわかったが、現行版と同じ尺度構成で採点したとしても信頼性は高く保たれているので、得られる結果が大きく変わるような歪みの可能性は低いと解釈した。

図表 7-5 各領域、志向性の信頼性係数(クロンバックの α)

領域	A 検査	C 検査	志向性	B 検査
現実的領域 Realistic(R領域)	.89	.91	対情報志向 Data(D志向)	.87
研究的領域 Investigative(I領域)	.91	.93	対人志向 People(P志向)	.90
芸術的領域 Artistic(A領域)	.89	.90	対物志向 Thing(T志向)	.86
社会的領域 Social (S領域)	.85	.88		
企業的領域 Enterprising (E領域)	.88	.91		
慣習的領域 Conventional(C領域)	.89	.91		

次に、職業レディネス・テストの粗点を用いて得点化を行い、各領域、各志向性別の平均値と標準偏差を算出した。職業興味と職務遂行の自信度の得点の範囲は各領域 (RIASEC) ともに 0 点から 18 点、基礎的志向性は対情報志向 (D) と対人志向 (P) の得点の範囲は 0 点から 24 点、対物志向 (T) の範囲は 0 点から 16 点である。

職業レディネス・テストでは領域によっては得点の分布に男女差がみられるため、男女別の換算基準を用意している。そこで、今回も男女別の平均値と男女あわせた平均値を算出した。結果を図表 7-6 に示す。

職業興味を男女別にみると、男性では、慣習的領域 (C) が最も高く、次に研究的領域 (I) が高く、その後、現実的 (R)、芸術的 (A)、企業的 (E) 領域が同程度に高く、社会的領域 (S) が最も低い。女性においても男性と同様に慣習的領域 (C) が最も高い。その次に芸術的 (A) と社会的領域 (S) が同程度に高く、研究的 (I)、企業的領域 (E) がそれに続き、現実的領域 (R) が最も低くなっている。

次に、職業興味と同じ項目を用いて測定している職務遂行の自信度をみると、男性では慣習的領域 (C) が最も高く、研究的 (I)、現実的領域 (R) が同程度の高さで続き、その次に、企業的 (E)、社会的 (S)、芸術的領域 (A) が同程度となっている。女性では、慣習的領域 (C) が最も高く、次に社会的領域 (S) が高い。続いて、芸術的 (A)、研究的 (I)、企業的

領域（E）がほぼ同程度の値で、最も低いのは現実的領域（R）となった。

図表 7-6 職業レディネス・テストの下位検査の平均値(M)と標準偏差(SD)

		男性(n=1198)		女性(n=1195)		計(n=2393)	
		M	SD	M	SD	M	SD
職業興味	現実的領域 (R)	5.85	4.76	3.05	3.84	4.46	4.55
	研究的領域 (I)	7.32	5.43	4.51	5.13	5.92	5.47
	芸術的領域 (A)	5.83	4.99	5.43	5.11	5.63	5.05
	社会的領域 (S)	4.69	4.49	5.28	4.34	4.99	4.42
	企業的領域 (E)	5.83	4.95	4.27	4.36	5.05	4.73
	慣習的領域 (C)	7.66	5.15	7.84	5.25	7.75	5.20
基礎的志向性	情報を集める (D1)	4.08	2.46	3.69	2.26	3.88	2.37
	好奇心を満たす (D2)	4.32	2.31	4.17	2.24	4.25	2.28
	情報を活用する (D3)	4.66	2.43	4.36	2.29	4.51	2.36
	対情報志向 (D) 合計	13.06	6.10	12.22	5.66	12.64	5.90
	自分を表現する (P1)	2.05	2.46	2.05	2.31	2.05	2.38
	みんなと行動する (P2)	2.82	2.54	2.81	2.35	2.81	2.45
	人の役にたつ (P3)	4.78	2.45	5.36	2.16	5.07	2.33
	対人志向 (P) 合計	9.65	6.38	10.22	5.69	9.93	6.05
	物をつくる (T1)	3.20	2.69	3.05	2.49	3.13	2.59
	自然に親しむ (T2)	3.26	2.54	3.37	2.40	3.31	2.47
対物志向 (T) 合計	6.46	4.55	6.42	4.20	6.44	4.38	
職務遂行の自信度	現実的領域 (R)	5.13	4.84	2.47	3.50	3.80	4.43
	研究的領域 (I)	5.71	5.21	3.28	4.48	4.50	5.01
	芸術的領域 (A)	4.31	4.62	3.80	4.37	4.06	4.50
	社会的領域 (S)	4.59	4.66	4.90	4.50	4.75	4.58
	企業的領域 (E)	4.65	4.83	3.17	4.03	3.91	4.51
	慣習的領域 (C)	8.04	5.44	7.63	5.48	7.83	5.46

基礎的志向性については、3つの志向性の合計値のうち、対情報志向（D）と対人志向（P）は3つの尺度の合計点で最高点は24点、対物志向（T）は2つの尺度の合計点で最高点は16点であるため、数値上の大きさでは単純に比較できない。ただ下位の尺度（D1など）はそれぞれ8項目で得点は0点から8点の間であるため、高めのものをみていくと、男性では、対情報志向（D）はどれも高めで4点程度、対人志向（P）のうち「人の役にたつ（P3）」は高めで4点程度であるが、他は2点台である。また、対物志向（T）はそれぞれ3点台となっている。女性では、対情報志向（D）の「情報を活用する（D3）」と「好奇心を満たす（D2）」が4点台で、「情報を集める（D1）」はそれよりも低めである。対人志向（P）をみると「人

の役にたつ (P3)」が最も高く5点台であるが、そのほかは2点台と低くなっている。対物志向 (T) はどちらも3点台であるが、「物をつくる (T1)」の方がやや低い。

基礎的志向性の各下位尺度における得点の高さに関しては男女間で大きな違いはない。ただ、相対的な得点の高さをみると、職業興味において男女間で得点に違いがみられる部分は基礎的志向性にも反映されているようである。例えば、職業興味における研究的領域 (I) の得点は男性の方が女性より高くなっているが、研究的領域と関連のある基礎的志向性の対情報志向 (D) の値をみると、全体として男性の方が高めとなっている。また、職業興味の社会的領域 (S) の得点は男性より女性で高いが、関連のある基礎的志向性の対人志向 (P) の値をみると、男性より女性の方が高めとなっている。

なお、このデータに関する職業レディネス・テストの平均値をみると、慣習的領域 (C) が男女で最も高くなっていることが特徴的である。それ以外の得点の傾向は概ねこれまでの職業レディネス・テストの回答結果と整合性がみられるものであった。このような慣習的領域 (C) の得点の高さには、調査対象者がWEBモニターという点も影響していることが考えられ、今後のデータの収集に関しては対象者を広げた紙筆検査によるデータも収集し検討していくことが必要であると考えられる。

(2) 職業レディネス・テストの粗点と新規尺度の下位検査の得点間の相関係数

続いて、職業レディネス・テストの得点と新規尺度との得点との関連について検討した結果を示す。職業レディネス・テストと新規尺度との関連を求める場合には、項目への反応パターンが検討されるだけで、性別による平均値の差は影響しないため、男女を合計したサンプル全体で、職業興味の6領域、職務遂行の自信度の6領域、基礎的志向性の3志向性とそれぞれの下位尺度8つについて合計得点を求め、新規に作成した尺度との相関係数を算出した。新規尺度との相関係数は6項目版、7項目版、8項目版でそれぞれ別々に算出している。新規尺度との相関係数のうち、職業興味との相関係数を図表7-7に、職務遂行の自信度との相関係数を図表7-8に、基礎的志向性との相関係数を図表7-9と図表7-10に示した。

他の分析結果と同様にこの結果においても、データのサンプルサイズが大きいことの影響から多くの値が有意となっている。そこで、.50以上、.40以上、.30以上の値にはそれぞれ網掛けをした。新尺度の項目数は違っても結果としてはほぼ同じ傾向が示されている。以下、表ごとに結果をみていく。

①新規尺度と職業興味 (A 検査) および職務遂行の自信度 (C 検査) との関連

職業興味の6領域に関する理論を構築したホランドは、職業興味は人のパーソナリティを反映するものとして捉えている (Holland,1992)。つまり、職業興味の6領域は個人のパーソナリティタイプの表れであるといえる。そのような観点からみると、相関係数は今回作成した新しい尺度の得点がそれぞれどのようなタイプと関連が高いのか、あるいは低いのかを示す指標として捉えることができる。

まず、職業興味全体として図表 7-7 をみると、今回作成した尺度との関連は特定の領域を除いてそれほど顕著に表れていない。職業興味検査は職業への関心を測定しているので、今回作成した尺度はそれとは少し異なる側面を捉えていることが明らかとなった。

図表 7-7 職業レディネス・テストの A 検査(6 領域)の尺度得点と新規尺度の下位尺度との相関係数(Pearson の r)

新規尺度	項目数	職業興味 (A検査)					
		R領域	I領域	A領域	S領域	E領域	C領域
自己成長	6項目	.134 ***	.174 ***	.213 ***	.242 ***	.302 ***	.104 ***
	7項目	.138 ***	.178 ***	.220 ***	.249 ***	.314 ***	.102 ***
	8項目	.130 ***	.169 ***	.214 ***	.242 ***	.306 ***	.099 ***
社会貢献	6項目	.190 ***	.212 ***	.192 ***	.387 ***	.331 ***	.107 ***
	7項目	.187 ***	.208 ***	.192 ***	.391 ***	.328 ***	.111 ***
	8項目	.194 ***	.215 ***	.197 ***	.406 ***	.332 ***	.116 ***
経済性	6項目	.100 ***	.148 ***	.130 ***	.127 ***	.232 ***	.134 ***
	7項目	.105 ***	.142 ***	.135 ***	.129 ***	.238 ***	.132 ***
	8項目	.093 ***	.131 ***	.130 ***	.126 ***	.230 ***	.142 ***
地位	6項目	.209 ***	.188 ***	.227 ***	.270 ***	.423 ***	.062 *
	7項目	.213 ***	.192 ***	.248 ***	.270 ***	.434 ***	.055 **
	8項目	.212 ***	.190 ***	.252 ***	.273 ***	.432 ***	.059 **
仕事と生活の バランス	6項目	-.047 *	.013 <i>n.s.</i>	.033 <i>n.s.</i>	-.043 *	-.026 <i>n.s.</i>	.151 ***
	7項目	-.056 **	.012 <i>n.s.</i>	.036 †	-.046 *	-.026 <i>n.s.</i>	.147 ***
	8項目	-.059 **	.012 <i>n.s.</i>	.042 *	-.044 *	-.017 <i>n.s.</i>	.144 ***
主体的進路選択	6項目	.053 *	.103 ***	.168 ***	.099 ***	.185 ***	.060 **
	7項目	.045 *	.098 ***	.160 ***	.106 ***	.187 ***	.060 **
	8項目	.034 <i>n.s.</i>	.092 ***	.154 ***	.094 ***	.175 ***	.063 **
気持ちの 切り替え	6項目	.134 ***	.080 ***	.086 ***	.198 ***	.238 ***	.037 †
	7項目	.134 ***	.082 ***	.097 ***	.205 ***	.246 ***	.033 †
	8項目	.139 ***	.078 ***	.097 ***	.207 ***	.246 ***	.032 <i>n.s.</i>
外界への積極性	6項目	.128 ***	.208 ***	.236 ***	.253 ***	.335 ***	.150 ***
	7項目	.141 ***	.208 ***	.234 ***	.255 ***	.331 ***	.152 ***
	8項目	.145 ***	.204 ***	.248 ***	.271 ***	.352 ***	.145 ***
社会生活への 心構え	6項目	-.026 <i>n.s.</i>	.074 ***	.044 *	.114 ***	.120 ***	.154 ***
	7項目	-.023 <i>n.s.</i>	.079 ***	.046 *	.119 ***	.127 ***	.155 ***
	8項目	-.025 <i>n.s.</i>	.078 ***	.042 *	.109 ***	.121 ***	.158 ***

***... $p < .001$, **... $p < .01$, *... $p < .05$, †... $p < .10$, *n.s.*...有意水準に達していない

4.0 $\leq r$

3.0 $\leq r < 4.0$

ただ、その中で正の相関が比較的高いものを挙げていくと、 $r = .40$ 以上の組み合わせとして「地位」と企業的領域 (E) があつた。また「社会貢献」と社会的領域 (S) との相関係数も .40 程度であつた (8 項目の時のみ $r = .40$ 以上)。 $r = .30 \sim .40$ となつたのは「自己成長」、「社

会貢献」と企業的領域（E）および「外界への積極性」と企業的領域（E）であった。企業的領域（E）が高い場合は、他者との関わりの中で積極的に行動していくことや、集団の中でリーダーシップを発揮し組織運営や管理のような仕事に関心をもっているタイプであることを示すが、そのようなタイプであることが新規尺度の「地位」と正の相関を持つことは納得できる結果である。また、対人的な職業への関心が高く、なおかつ人に奉仕するような仕事への関心が高い社会的領域（S）と新規尺度の「社会貢献」との関連性の高さも納得できるものであった。

新規尺度と職業興味にみられるこのような関連は職務遂行の自信度との関連においても同じように示されている。図表 7-8 をみると、職業興味と同じく「地位」と企業的領域（E）および「社会貢献」と社会的領域（S）の組み合わせで $r=.40$ 以上の値が得られた。「社会貢献」は企業的領域（E）との相関も比較的高く、「地位」は芸術的領域（A）、社会的領域（S）との相関も比較的高かった。このほか「気持ちの切り替え」、「外界への積極性」は、社会的領域（S）や企業的領域（E）などの対人的要素に関連する領域への自信度と.30 程度の正の相関を示した。

図表 7-8 職業レディネス・テストの C 検査(6 領域)の尺度得点と新規尺度の下位尺度との相関係数(Pearson の r)

新規尺度	項目数	職務遂行の自信度 (C検査)					
		R領域	I領域	A領域	S領域	E領域	C領域
自己成長	6項目	.156 ***	.192 ***	.208 ***	.290 ***	.275 ***	.224 ***
	7項目	.161 ***	.198 ***	.218 ***	.296 ***	.287 ***	.221 ***
	8項目	.150 ***	.187 ***	.208 ***	.289 ***	.276 ***	.215 ***
社会貢献	6項目	.194 ***	.245 ***	.208 ***	.402 ***	.318 ***	.207 ***
	7項目	.193 ***	.244 ***	.209 ***	.410 ***	.319 ***	.213 ***
	8項目	.201 ***	.249 ***	.216 ***	.422 ***	.325 ***	.215 ***
経済性	6項目	.134 ***	.138 ***	.119 ***	.188 ***	.205 ***	.214 ***
	7項目	.141 ***	.139 ***	.127 ***	.189 ***	.212 ***	.206 ***
	8項目	.123 ***	.123 ***	.116 ***	.183 ***	.196 ***	.211 ***
地位	6項目	.288 ***	.276 ***	.295 ***	.340 ***	.439 ***	.180 ***
	7項目	.297 ***	.285 ***	.319 ***	.341 ***	.454 ***	.170 ***
	8項目	.295 ***	.283 ***	.322 ***	.343 ***	.452 ***	.172 ***
仕事と生活の バランス	6項目	-.061 **	-.038 †	-.024 n.s.	-.026 n.s.	-.069 ***	.142 ***
	7項目	-.071 ***	-.044 *	-.028 n.s.	-.027 n.s.	-.075 ***	.136 ***
	8項目	-.073 ***	-.046 *	-.025 n.s.	-.024 n.s.	-.070 ***	.135 ***
主体的進路選択	6項目	.077 ***	.119 ***	.139 ***	.151 ***	.160 ***	.151 ***
	7項目	.076 ***	.116 ***	.136 ***	.165 ***	.167 ***	.160 ***
	8項目	.071 ***	.109 ***	.135 ***	.154 ***	.161 ***	.163 ***
気持ちの 切り替え	6項目	.222 ***	.172 ***	.172 ***	.297 ***	.305 ***	.185 ***
	7項目	.223 ***	.175 ***	.185 ***	.304 ***	.310 ***	.180 ***
	8項目	.233 ***	.178 ***	.193 ***	.306 ***	.316 ***	.178 ***
外界への積極性	6項目	.148 ***	.222 ***	.223 ***	.302 ***	.308 ***	.264 ***
	7項目	.166 ***	.226 ***	.228 ***	.307 ***	.309 ***	.267 ***
	8項目	.177 ***	.235 ***	.250 ***	.325 ***	.338 ***	.262 ***
社会生活への 心構え	6項目	-.020 n.s.	.042 *	.027 n.s.	.139 ***	.082 ***	.233 ***
	7項目	-.016 n.s.	.047 *	.026 n.s.	.144 ***	.088 ***	.234 ***
	8項目	-.022 n.s.	.041 †	.016 n.s.	.134 ***	.079 ***	.237 ***

***... $p < .001$, **... $p < .01$, *... $p < .05$, †... $p < .10$, n.s. ...有意水準に達していない

4.0 $\leq r$

3.0 $\leq r < 4.0$

このように職務遂行の自信度との関連では、職業興味に比べて「地位」や「気持ちの切り替え」、「外界への積極性」において.30以上の正の相関がみられる組み合わせが増えている。職務遂行の自信度は、職務をうまくやれるという自信度を回答してもらっているので、企業の領域（E）、社会的領域（S）、芸術的領域（A）の仕事内容に関して自信をもって回答するタイプの方が気持ちの切り替えがうまく、外界への積極性が高く、地位を志向するという結果を示すと考えることができる。

なお、ここまで正の値の相関係数の高い組み合わせだけに注目してきたが、負の相関係数や相関関係がほとんど見られないような値が低い組み合わせについても見ておきたい。例えば、職業興味や職務遂行の自信度に関して相関係数が小さかったり負の値を示した新規尺度として「仕事と生活のバランス」がある。仕事と生活を切り離して考えたいという気持ちが強い傾向は、職業興味や職務遂行の自信度に関する肯定的な回答とは関連しないか、もしくは反対の傾向を示すことが示唆されている。職業興味との関連をみると、現実的（R）、社会的（S）、企業の領域（E）との関係で負の値が示されており、職務遂行の自信度では、上記に加えて、研究的（I）、芸術的（A）でも負の値となった。慣習的領域（C）だけは、職業興味でも職務遂行の自信度でも「仕事と生活のバランス」と正の相関を示した。

この他、職業興味では「主体的進路選択」と現実的（R）、慣習的（C）との正の相関係数の値が小さく、「気持ちの切り替え」と慣習的領域（C）の間には関連がほとんど見られなかった。また、「社会生活への心構え」と現実的領域（R）の間では有意ではないが負の相関係数が得られた。なお、「社会生活への心構え」に関しては、職業興味と職務遂行の自信度の両方で、社会的（S）、企業の領域（E）、慣習的領域（C）の正の相関の値に比べて、現実的（R）、研究的（I）、芸術的領域（A）の相関係数が低くなっている。

②新規尺度と基礎的志向性（B検査）との関連

対情報志向（D）、対人志向（P）、対物志向（T）のそれぞれの合計得点と各尺度との相関係数を図表 7-9 に示す。全体として新規尺度は、職業興味や職務遂行の自信度よりも基礎的志向性との方で高い正の相関を示していることがわかる。基礎的志向性は日常生活のさまざまな行動や物の見方についての回答を求める項目で構成されているため、今回の新規尺度で測定している特徴との関連性も高くなったと考えられる。

対情報志向（D）については、「外界との積極性」との間に.50以上の正の相関がみられたほか、「自己成長」、「社会生活への心構え」、「主体的進路選択（8項目）」との相関係数が.40台となった。「社会貢献」、「経済性」、「主体的進路選択（6項目、7項目）」との関係も.30台の正の相関を示した。対人志向（P）については、「社会貢献」、「外界への積極性（8項目）」との関連が.50以上となり、このほか「自己成長」、「地位」、「外界への積極性（6項目、7項目）」との間に.40台の正の相関がみられた。加えて「主体的進路選択」、「気持ちの切り替え」、「社会生活への心構え」との間にも.30台の正の相関が見られた。対物志向（T）については、.30台の正の相関が見られたものは「自己成長」と「外界への積極性」のみであった。

図表 7-9 職業レディネス・テストの B 検査 (3 志向性) の尺度得点と
新規尺度の下位尺度との相関係数 (Pearson の r)

新規尺度	項目数	基礎的志向性 (B検査)		
		対情報志向 (D)	対人志向 (P)	対物志向 (T)
自己成長	6項目	.422 ***	.455 ***	.326 ***
	7項目	.426 ***	.462 ***	.326 ***
	8項目	.420 ***	.456 ***	.325 ***
社会貢献	6項目	.384 ***	.504 ***	.284 ***
	7項目	.389 ***	.513 ***	.289 ***
	8項目	.391 ***	.515 ***	.291 ***
経済性	6項目	.309 ***	.291 ***	.222 ***
	7項目	.300 ***	.290 ***	.217 ***
	8項目	.310 ***	.293 ***	.223 ***
地位	6項目	.295 ***	.434 ***	.221 ***
	7項目	.291 ***	.434 ***	.225 ***
	8項目	.296 ***	.440 ***	.226 ***
仕事と生活の バランス	6項目	.216 ***	.062 **	.110 ***
	7項目	.221 ***	.061 **	.113 ***
	8項目	.225 ***	.072 ***	.122 ***
主体的進路選択	6項目	.386 ***	.325 ***	.260 ***
	7項目	.398 ***	.336 ***	.265 ***
	8項目	.401 ***	.331 ***	.262 ***
気持ちの 切り替え	6項目	.250 ***	.377 ***	.198 ***
	7項目	.253 ***	.388 ***	.203 ***
	8項目	.249 ***	.386 ***	.203 ***
外界への積極性	6項目	.504 ***	.492 ***	.354 ***
	7項目	.502 ***	.490 ***	.361 ***
	8項目	.500 ***	.520 ***	.359 ***
社会生活への 心構え	6項目	.408 ***	.322 ***	.198 ***
	7項目	.416 ***	.333 ***	.205 ***
	8項目	.415 ***	.323 ***	.200 ***

***... $p < .001$, **... $p < .01$

5.0 $\leq r$ (太字) 4.0 $\leq r < 5.0$
3.0 $\leq r < 4.0$

基礎的志向性全体と新規尺度との関連をみると、対物志向 (T) よりも対情報志向 (D) や対人志向 (P) との間で有意な正の相関が得られている。新規尺度で取り上げた概念には情報や人との関わり方に関する考え方や感じ方を含むものが多いことが影響していると考えられる。また、新規尺度のうちどの志向性とも関連がみられなかったのは「仕事と生活のバランス」であり、この尺度の得点は基礎的志向性の各尺度とは独立であることが示された。なお、職業興味や職務遂行の自信度の 6 領域とは異なり、新規尺度と基礎的志向性の間に負の相関係数が得られたものはなかった。

次に、基礎的志向性の各志向性の下位尺度と新規尺度との間で相関係数を求めた結果を図表 7-10 に示す。多くの下位尺度と新規尺度との間に.30 以上の正の相関がみられた。対情報志向 (D) に含まれる下位尺度から順にみていくと、「情報を集める (D1)」と「外界への積極性」、「好奇心を満たす (D2)」と「外界への積極性」との間に.40 以上の正の相関が見られた。また、「情報を活用する (D3)」と「社会生活への心構え (7 項目、8 項目)」との間にも.40 以上の正の相関が見られた。「情報を活用する (D3)」という尺度の中には、情報の整理や管理への志向性を聞く項目があり、それが「社会生活への心構え」の項目にある規則的な生活への志向と共通の特徴を取り出しているものと推察された。「経済性」、「仕事と生活のバランス」、「気持ちの切り替え」については対情報志向 (D) の下位尺度との間に.30 以上の相関係数は見られなかった。

図表 7-10 職業レディネス・テストの B 検査(8 つの下位志向性尺度)の尺度得点と

新規尺度の下位尺度との相関係数(Pearson の r)

新規尺度	項目数	基礎的志向性 下位尺度							
		D1 (情報を集める)	D2 (好奇心を満たす)	D3 (情報を活用する)	P1 (自分を表現する)	P2 (みんなと行動する)	P3 (人の役にたつ)	T1 (物をつくる)	T2 (自然に親しむ)
自己成長	6項目	.352 ***	.381 ***	.334 ***	.313 ***	.354 ***	.489 ***	.275 ***	.290 ***
	7項目	.357 ***	.383 ***	.335 ***	.323 ***	.359 ***	.492 ***	.273 ***	.292 ***
	8項目	.350 ***	.379 ***	.332 ***	.314 ***	.352 ***	.492 ***	.270 ***	.293 ***
社会貢献	6項目	.334 ***	.360 ***	.277 ***	.324 ***	.384 ***	.573 ***	.185 ***	.311 ***
	7項目	.336 ***	.363 ***	.284 ***	.329 ***	.392 ***	.582 ***	.188 ***	.316 ***
	8項目	.339 ***	.365 ***	.285 ***	.333 ***	.395 ***	.582 ***	.187 ***	.319 ***
経済性	6項目	.272 ***	.264 ***	.245 ***	.219 ***	.236 ***	.285 ***	.199 ***	.184 ***
	7項目	.266 ***	.255 ***	.237 ***	.222 ***	.236 ***	.278 ***	.199 ***	.176 ***
	8項目	.270 ***	.266 ***	.246 ***	.217 ***	.234 ***	.293 ***	.200 ***	.185 ***
地位	6項目	.312 ***	.231 ***	.200 ***	.408 ***	.375 ***	.315 ***	.185 ***	.199 ***
	7項目	.309 ***	.230 ***	.196 ***	.416 ***	.375 ***	.306 ***	.193 ***	.197 ***
	8項目	.313 ***	.235 ***	.200 ***	.417 ***	.380 ***	.316 ***	.194 ***	.198 ***
仕事と生活のバランス	6項目	.139 ***	.169 ***	.236 ***	-.033 <i>n.s.</i>	.038 †	.155 ***	.095 ***	.095 ***
	7項目	.140 ***	.177 ***	.239 ***	-.034 †	.033 <i>n.s.</i>	.158 ***	.097 ***	.099 ***
	8項目	.146 ***	.183 ***	.240 ***	-.024 <i>n.s.</i>	.042 *	.166 ***	.106 ***	.105 ***
主体的進路選択	6項目	.307 ***	.327 ***	.341 ***	.219 ***	.243 ***	.364 ***	.227 ***	.222 ***
	7項目	.317 ***	.331 ***	.355 ***	.227 ***	.252 ***	.374 ***	.231 ***	.227 ***
	8項目	.319 ***	.331 ***	.362 ***	.227 ***	.247 ***	.369 ***	.230 ***	.223 ***
気持ちの切り替え	6項目	.253 ***	.178 ***	.200 ***	.364 ***	.330 ***	.260 ***	.160 ***	.184 ***
	7項目	.258 ***	.180 ***	.200 ***	.376 ***	.342 ***	.264 ***	.163 ***	.189 ***
	8項目	.257 ***	.172 ***	.199 ***	.378 ***	.342 ***	.255 ***	.164 ***	.188 ***
外界への積極性	6項目	.443 ***	.447 ***	.385 ***	.382 ***	.380 ***	.487 ***	.298 ***	.316 ***
	7項目	.438 ***	.440 ***	.390 ***	.384 ***	.377 ***	.482 ***	.304 ***	.320 ***
	8項目	.448 ***	.437 ***	.378 ***	.418 ***	.408 ***	.494 ***	.302 ***	.320 ***
社会生活への心構え	6項目	.308 ***	.323 ***	.398 ***	.190 ***	.226 ***	.403 ***	.147 ***	.196 ***
	7項目	.315 ***	.334 ***	.402 ***	.197 ***	.235 ***	.415 ***	.153 ***	.203 ***
	8項目	.311 ***	.329 ***	.406 ***	.188 ***	.226 ***	.407 ***	.149 ***	.199 ***

*** $p < .001$, † $p < .10$, *n.s.*…有意水準に達していない5.0 ≤ r (太字)4.0 ≤ $r < 5.0$ 3.0 ≤ $r < 4.0$

対人志向 (P) では多くの尺度と正の相関が見られ、特に「人の役にたつ (P3)」と「社会貢献」との間には.50 以上の正の相関が示された。このほか、「人の役にたつ (P3)」については「自己成長」、「外界への積極性」、「社会生活への心構え」との間に.40 台の正の相関があった。他方、対人志向 (P) のうち「自分を表現する (P1)」については「地位」および「外界への積極性 (8 項目)」との間に.40 台の相関があり、「みんなと行動する (P2)」と「外界への積極性 (8 項目)」との間にも.40 台の正の相関が得られた。対人志向 (P) に含まれる 3 つの志向性は人との関わり方の異なる側面を聞くものであるが、新規尺度との関連をみると内容的に関連性が高いと思われる尺度間の相関係数が高くなっているため、妥当な結果が得られていると考えられる。なお、対情報志向 (D) と同様に、「経済性」と「仕事と生活のバランス」については対人志向 (P) の下位尺度との間で.30 以上の相関係数は得られなかった。

対物志向 (T) については新規尺度と高い相関が示されたものは少なく、.30 台の正の相関が得られたのは、「物をつくる (T1)」と「外界への積極性 (7 項目、8 項目)」の尺度間および「自然に親しむ (T2)」と「社会貢献」、「外界への積極性」の尺度間であった。今回作成した新規尺度の多くは対物志向 (T) として測定される特性とは独立した特性を測定しているとみることができる。

5. まとめ

以上、職業レディネス・テストに追加して行うために作成された「仕事選び基準尺度」と「基礎的性格特性尺度」、「基礎的生活特性尺度」との尺度間の関連および職業レディネス・テストに含まれる各尺度との関連性を検討した。

「仕事選び基準尺度」は仕事をどのような基準で選ぶかという点からの価値観的な要素を含み、「基礎的性格特性」は人や情報に対する関わり方のスタイルや物事に対する受け止め方などのパーソナリティの特徴、「基礎的生活特性」は普段の生活信条的な物の見方を反映させた尺度となっている。そのため、3 つの尺度はそれぞれ人の個性の異なる側面の把握を目的として作成されたものであるが、概念間の関係をみると、いくつかの尺度間には高い正の相関がみられ、価値観、パーソナリティ、生活信条のような別々の側面であっても各要素が相互に影響しあっている部分があることと、その関連には納得できる特徴が多いことがわかった。したがって、複数の尺度が示している結果を総合的に解釈するとき、関連のありそうな尺度間、あるいは反対の傾向を示す尺度間の関係を確認して、そこに一貫した傾向を読み取ることができれば、回答者の個性を複数の側面から正確に把握することが可能になると考えられる。ただ、今回示されたような各尺度間の相関係数の関係だけでそれを行うことは難しいので、今後、検査として構造化していく上で、尺度値を解釈するための体系的な仕組みを作っていくことが必要になるだろう。

他方、職業レディネス・テストと新規尺度との関連について検討した結果については、企

業的領域（E）や社会的領域（S）などの一部の領域を除いて、職業興味と職務遂行の自信度と新規尺度の間にはそれほど多くの高い相関関係は見られず、新規尺度で測定されている特性は職業志向性とは独立の特性であることが示唆された。一方、職業レディネス・テストの基礎的志向性と新規尺度との間には特に対情報志向（D）と対人志向（P）に関して多くの高い正の相関が見られた。新規尺度と対物志向（T）との間の高い相関関係は他の志向性に比べて見られなかったため、今回作成された尺度は情報や人との関わり方を扱っている点で、対情報志向（D）や対人志向（P）の結果を解釈する上での裏付けや補足を行うための材料として使うことができると想定される。

なお、職業レディネス・テストの基礎的志向性尺度を今回の調査対象者に実施した場合、対情報志向（D）と対人志向（P）の因子として想定したいくつかの項目において、他の志向性への負荷量が高くなってしまいうという構造上の問題点があることも見いだされている。その点も含めて、今後、高卒者以上に実施するものとしての職業レディネス・テストの構造化にあたっては、今回開発した新規尺度と基礎的志向性尺度の扱いについてさらに詳しく検討していく必要があると考えられる。

引用文献

Holland, J.L. (1992). *Making Vocational Choices*. 3rd, ed. Psychological Assessment Resources. (渡辺三枝子・松本純平・道谷里英 共訳 2013 「ホルランドの職業選択理論—パーソナリティと働く環境」 雇用問題研究会.)

第8章 総括—検査としての構造化に向けて

1. 新規尺度の検討結果のまとめ

職業レディネス・テストの改訂作業の一環として、本書では、大学生等の高等教育課程の在学者と30歳台前半までの若年者に向けた新しい尺度の作成について検討を行ってきた。第4章から第6章で述べられた通り、新しく追加する尺度としては、働くことについての考え方や基本的な態度をはかる「仕事選び基準尺度」、職場に適応して定着していくために理解しておくことと望ましい特性としての「基礎的性格特性」や「基礎的生活特性」という3つが作成された。それぞれの尺度には各特性を詳しくみていくための下位の尺度が含まれており、「仕事選び基準尺度」には6つ、「基礎的性格特性」には2つ、「基礎的生活特性」としては1つの尺度およびチェックリストが作られた。

続く第7章では新規に作成された尺度間の関連性の検討と本体である職業レディネス・テストとの関連性の検討が行われた。その結果、新規尺度で測定されている概念においてはそれぞれ尺度間の関連が高いと予想される部分については概して正の相関をもち、関連が低いと予想される部分については負の相関あるいは無相関という結果が得られた。したがって、現時点の検討結果を総合的に判断すると、今回作成された尺度は当初、研究の開始にあたって想定した内容の特性を測定することができていると考えている。

ただ、この新規尺度を職業レディネス・テストに追加して実施する検査として最終的に完成させるためには、学校や職業相談の場で実施者や回答者が使いやすく、また、進路指導や就職支援に役立ててもらえるような情報提供ができる形での構造化が必要である。本章では、最後の総括として、検査としての構造化に向けて残された課題をとりあげておきたい。

2. 実用化に向けた検査としての構造化に関する検討課題

(1) 項目数について

今回、3つの尺度を構成するにあたっては、一つの特性を測定するための項目数として6項目から8項目が選定されている。一般には項目数は多い方が測定の信頼性は高くなり、本研究で得られた信頼性をみても、6項目より7項目、8項目の方が信頼性係数は高くなった。ただ、活用場面を考えると、今回作成された尺度全体では、基礎的生活特性のチェックリストは別として9つの特性が測定されるため、各6項目の場合は全部で54項目、8項目の場合は72項目への回答を求めることになる。1項目の文字数として、極端に長いものは作成・選定してないつもりであるが、項目数が多くなると回答や採点時間が長くなり、回答者、実施者への負担は大きくなる。そのため、実用化に向けては、検査用紙として作成した形で実地検証を行い、8項目にした場合の実施時間や採点時間を考慮して項目数を決めていく必

要がある。なお、既に現時点において、項目数を最大の 8 項目とした全体で 72 項目の試行版のテスト用紙を作成し、大学生に実施するという検証を始めているが、その結果では回答にかかる時間は想定よりも短くすんでいる（10 分程度）。今後も試行的な実施はしていく予定であるが、8 項目版でも特に問題はないことが予想される。

（2）検査用紙と採点方式について

職業レディネス・テスト第 3 版では問題用紙が冊子となっており、回答用紙は A4 サイズ 1 枚の別紙で作られている。受検者は問題用紙を読みながら、回答用紙の所定の回答欄に答えを記入していく。全部の回答の記入が終わったら、用紙の右の合計欄を使って A 検査、B 検査、C 検査の各下位尺度の粗点を計算し、続いて、その値を回答用紙の裏面に転記する。裏面には粗点を換算点におきかえるための表があり、転記した粗点に該当する 6 領域と 3 つの志向性の換算点（パーセンタイル順位の値）¹⁷を表中から見つけて換算点の欄に記入し、採点は終了となる。このように記述すると複雑なようであるが、この方式は中学生、高校生でも自己採点できるようにわかりやすく作られているものである。

今回、高卒者以上の若者に向けた新規尺度を開発するにあたっては、職業レディネス・テストに追加して実施することを想定したため、できる限り実施と採点が簡単で負担感が少ないものにすることを目標とした。そこで、前述の項目数とも関連するが、検査用紙に関しては、検査項目と回答欄が A3 サイズの用紙 1 枚程度に収まり、なおかつそれと同じ用紙で自己採点が簡易にできるような方式が望ましいと考えている。また、検査用紙で算出された各特性の粗点については別紙のワークシートで具体的な解釈に結びつけていく方式にすることが想定されている。

（3）粗点の表示とワークシート

職業レディネス・テストでは、男女別に粗点を換算してパーセンタイル順位を求め、その値を用いて「結果の見方、生かし方」というワークシートに用意されている職業興味等のプロフィール作成を行う。

今回作成された尺度についても職業レディネス・テストと同様に心理検査として位置づけるのであれば、標準化の手続きに従ってデータを収集し、規準集団の値の分布から換算点を求めていく必要があるだろう。ただ、今回、調査によって集めたデータで各特性に関する平均値と得点分布をみたところ、職業興味や職務遂行の自信度とは異なり、男女による平均値にはあまり大きな差がみられなかったが、その一方で、高等教育課程に在学している学生と現在仕事をしている就業者の平均値と得点分布には違いがあることがわかった。そのため換

¹⁷ パーセンタイル順位とは検査の得点を換算するときの規準の作り方の一方法である。規準集団において検査の得点を低い方から順に並べ、最高得点の値を 100 としたとき、各得点が規準集団の中でどのくらいの割合に位置づけられるかを示す概念である。

算規準を作成するにしても在学者と在職者は分ける必要があると考えられるが、現時点のデータにおいては在職者に比べて在学者の人数が少なくなっている。その点を明確にするには、再度あらためてデータを収集し、検討しなくてはならないだろう。

一方、今回作成された尺度は、職業レディネス・テストの職業興味や職務遂行の自信度のように、領域間の得点の水準を見比べて、どの領域が一番高いかを相互に比較して解釈するような構造にはなっていない。そこで、今回の新規尺度に現行版の職業レディネス・テストの尺度のような換算規準を用意する必要性に関しては、現時点ではまだ検討している段階である。標準化された検査のような厳密性はなくても、今回の調査で集められたデータを含め、回答者の教育課程での学歴や専攻学科について一定の条件を満たすデータを規準集団として用い、各特性についての規準集団の平均値を求めてその値を示し、新規尺度の受検者に参考にしてもらうような方式でも情報としては有用なのではないかとも考えている。この点については、新規尺度を一つの検査として構造化した後、実際に若者に実施してもらう試行段階を経て、確定していきたい。

(4) 各尺度の特性と職種、職業との関連づけ

職業レディネス・テストでは、検査の結果、RIASECの6領域のうち興味が高い領域や自信が高い領域が明らかになったら、その領域との関連が高い職種や職業名が手引やワークシートで参照できる。

今回作成された尺度で測定される9つの特性については、現時点において具体的な職種や職業との関連づけがまだ検討されていない。今回の調査における回答者の属性として、在職者に関しては現在就業中の業種、主な職種、配属先についての情報はあわせて回答してもらっているので、今後、これらの情報と各特性の平均値の関連を検討すれば、ある程度の見通しは立てられるだろう。しかし、職業のレベルまでの関連づけを行う資料は現時点において集められていないため、本研究で作成された新しい尺度に関する特性値を職業別に調べていく調査の実施は、この尺度を実用化していくにあたって必要かつ重要な課題であると考えている。

3. まとめ

本書は、大学生等、高卒者以上の若者の就職支援に向けた新しい尺度の開発について現時点で集められた資料の検討結果をまとめたものである。新しい尺度は、職業レディネス・テストで測定されている職業興味や職務遂行の自信度とは別の観点から、若者が自らの特性を理解し、それを職業や進路選択を考えるヒントとして役立ててもらえるような内容にすることを目指して開発された。

職業選択の発達段階に関する古くからの理論では、年齢が低い段階においては好きなことややりたいことといった興味を主軸として自分が就きたい仕事、なりたい仕事を考え、その少し後になると自分に何ができるのかという能力面を考慮して職業や進路を考えていく段階に進み、その次の段階として、自分自身の内部での価値体系を形成し、自らの目標と価値観に照らした職業選択を行う価値段階があるとされている（Ginzberg, Ginsburg, Axelrad & Herma, 1951）。このことから考えると、中学生や高校生よりも発達段階が進んだ18歳以上の若者になると、多面的な自己概念の形成が進み、仕事を通して何を求めるのかという価値観や、自分自身の性格には何があるのか、どのような働き方ならできそうなのか、という要素も仕事選びの際に大きく関わってくるだろう。そのような観点から見たとき、本研究で開発された新しい尺度は18歳以上の若者の進路選択に役立つ素材を提供することができるのではないかと考えている。

他方、実際に仕事や職業を選択するときには、自己理解とともに職業や仕事の理解も必要である。検査として、個人の特性を明らかにするのであれば、その個性を活かすためには現実的な選択においてどのような職業がその条件を満たすのかを示すことができなければ、就職支援や進路選択という観点から見たとき、本当に役立つ検査とはいえないだろう。その点に関する情報の整備についても十分に考慮しながら、今後、本検査の完成に向けた研究を進めていきたい。

引用文献

Ginzberg, E., Ginsburg, S.W., Axelrad, S. & Herma, J.L. (1951). *Occupational Choice. An Approach to a General Theory.* Columbia University Press.